

教育講演 4

ONCO-CARDIOLOGY の進歩

塩山 渉

大阪国際がんセンター 腫瘍循環器科

Summary

分子標的薬をはじめとする新しい抗がん剤の開発や、放射線療法、支持療法の進歩により、がん患者の予後は大きく改善している。その一方で、がん治療に伴う心血管系の副作用（心毒性）が問題となっており、患者の予後やQOLにも悪影響を及ぼすことが知られている。心毒性には心機能障害・心不全、冠動脈疾患、弁膜症、不整脈、高血圧症、血栓塞栓症など様々な循環器疾患が含まれるが、これら心毒性に対する治療や長期的な管理、さらには予防に関する専門的なアプローチの需要が高まり、腫瘍循環器学（Onco-Cardiology）と呼ばれる新しい学際領域が発展してきた。我々循環器内科医に期待されることは、がん専門医と互いに連携を深め、がん治療の中断や変更を回避することである。本講演では、心毒性の中でも心機能障害に焦点をあて、その機序や特徴、早期診断の方法や、長期的なマネジメントをする上で留意すべき点について概説する。

略歴

塩山 渉（しおやま わたる）

1999年 滋賀医科大学医学部卒業

2011年 大阪大学大学院医学系研究科内科系臨床医学専攻循環器内科学博士課程修了

[職歴] 大阪大学医学部附属病院第3内科で研修。NTT西日本大阪病院内科、国立循環器病研究センター心臓血管内科を経て、大学院にて血管新生シグナルに関する基礎研究に従事。
2011年より大阪府立成人病センター循環器内科（現大阪国際がんセンター）に勤務。

[専門領域] 腫瘍循環器（がん治療による心血管障害）